【学位論文審査の要旨】

【目的】

本論は、中国雲南省南部のハニ族村落社会におけるフィールドワークにもとづき、国家への包摂とグローバリゼーションへの接合が同時に進むなかにあってなお生活の場としての村落を基盤として紡がれる共同性を、その変異と複層に着目することで描き出す民族誌的研究である。

雲南省から東南アジアに跨る巨大な山域には、20 世紀中葉に至るまで国家による統制から自らを遠ざけ続けたさまざまな民族集団が居住してきた。ハニもまたその一つに数えられ、山間部に散在する村落を最大の社会単位として歴史を歩んできた。近代国家への編入後も、長く続いた人口移動を制限する政策のもと、人々の生活の場はなお村落を中心としたものであり続けた。しかしながら、1980 年代に本格化する〈改革開放〉への政策転換後には中国全土を縦横に結ぶ人口流動化と市場経済化が急速に進展し、ハニの村落社会もまたそのなかに組み込まれていく。

2010 年代半ばにフィールドワークを通じて筆者が目の当たりにした日常とは、そうした社会変化を味方につけて、より豊かな生活を実現しようとする実践の束にほかならない。就労機会を求めて都市との間を往来し、市場を介して手にする便利なモノを歓迎する人々の関心は、明らかに村落の外へと向かっていた。しかしながら、村落に基礎づけられる共同性とは、むしろそうした外部社会との接合面において際立った存在感をみせるものでもある。さまざまなモノや言説、制度との接触を対面的状況のなかで解釈し、取捨選択していく再帰的実践は、その都度“われわれ”の境界を喚起するからである。生活の文脈に即して集合的になされるそうした再帰的実践によって客体化される共同性は、伝統的な組織や儀礼への参与によって確認される「共同体」と重なりつつも、その外延を限定させることなく刷新させ続けるものである。本論は、こうした状況下において、ハニの村落生活のなかに浮かび上がるさまざまな共同性を、民族誌的記述を通じて描く試みである。

【目次】

序章　本研究の目的と方法
１．村の風景
２．問題の所在
2-1. ハニ＝アカ族の村落像
2-2. 共同体と共同性
2-3. カストム論とハニの「伝統」
2-4. ハニ＝アカ族をめぐる民族誌的研究
３．ハニ＝アカ族とは
3-1. 人口分布および言語分類

3-2. 生業
3-3. 親族
3-4. 村落組織と空間配置
４．調査地およびフィールドワークについて
4-1. 調査地および調査の概要
4-2. 紅河県
4-3. 調査村落――T 村と R 村
５．本論の構成

第一章　儀礼の流行、村の宴――象徴世界と日常生活との接合――
１．はじめに
２．儀礼と供物
2-1. ハニにおける儀礼範疇
2-2. 犠牲と供物の選択
2-3. 犠牲の扱い
３．儀礼実践の諸相
４．儀礼と日常の交点――「男の仕事」――
4-1. 儀礼の流行
4-2. 共食の場をめぐるポリティクス
4-3. 共に食べることの意味
５．小結

第二章　共同性の構築 ――村落の「キョウダイ」関係の想起――
１．はじめに
２．村落組織
2-1. 村落の境界
2-2. 伝統的職能者の役割の変化
2-3. 村落をめぐる「消滅の語り」
３．村落を跨ぐ共同性
3-1. キョウダイ関係の歴史記憶
3-2.村落を超える相互行為
４．ダム建設に伴う強制移住とその後の村落再建
５．集合住宅「美麗家園」建設と村落の再構築
5-1.分譲住宅地の完成
5-2. 「村落」建設に向けて
６．小結

第三章　生活の変化――“ソトのモノ”の受容――
１．はじめに
２．出稼ぎによる人口移動
2-1. T 村の人口構成の変化
2-2. 帰郷する男たち
2-3. 出稼ぎ先
３．村落生活の近代化
3-1.“外のモノ”の受容
3-2. モノ語りがみせる境界線
４．小結

第四章　たばこの配り方――“ヨリ”の振幅――
１．はじめに
２．ハニにおける喫煙の歴史記憶と現在
2-1. ハニの喫煙をめぐる表象
2-2. T 村における喫煙の歴史記憶――市場化以前のキセルたばこ
2-3. T 村における喫煙の現在――水パイプから紙巻きたばこへ
３．T 村におけるたばこの贈与・交換
3-1. ハニの村落における社会関係と共同体的規範
3-2. 命名儀礼後の宴席におけるたばこの贈与・交換
3-3. 葬儀後の宴席におけるたばこの贈与・交換
４．小結

第五章　外からのまなざし――知識・制度との接触と「村」の境界――
１．はじめに
２．ハニの村落における「世界遺産」認識
2-1. 世界遺産登録のニュース
2-2. 一年のあいだの変化
３．「文化的景観」とハニ文化
3-1. 世界遺産としての文化的景観
3-2. 中国側の申請書策定
3-3. イコモス側の再解釈
3-4. 観光開発のゆくえ
４．ハニによる「文化」をめぐる語り
4-1. 日常における翻訳のしくみ
4-2. ヨリ――文化的なるもの

５．小結

終章　生活の場に潜在する共同性
１．境界の複層性
２．ローカリズムの行方
３．閉じた再帰性
４．生活の場としての村落

付論　人類学との出会い、村との出会い
１．人類学との出会い、ハニとの出会い
２．フィールドへの長い道のり
３．ハニの村で暮らす
４．暮らしのなかに発見がある
５．村の将来を考える
６．おわりに――父との約束
参照文献

【要旨】

序章ではまずハニおよび調査地について概観した上で、関連する先行研究を検討しつつ本論の位置づけを明らかにした。人類学における近年の共同体論においては、意味や象徴のシステムからなる文化を内面化する舞台装置として共同体を定位することへの批判から、近代的な状況のなかで偶発的かつ状況的に構築される共同性の多様なありようが注目されてきた。このような視座は、従来のハニをめぐる民族誌的研究を相対化するにあたって有効であると同時に、まさに近代的状況に直面する今日のハニの生活を記述するための補助線となる。しかしながらそこでは、偶発的な出会いによってさまざまな局面においてとり結ばれる社会関係の創発的側面が強調される一方で、村落をはじめとする在地共同体の内部において生じる適応的実践はかならずしも議論の俎上に載せられてこなかった。本章ではこのことを指摘した上で、在地性（ローカリティ）と民族性（エスニシティ）を自明な所与として備えたハニの村落において涵養される共同性を民族誌的に記述することが、従来の研究に対する理論的貢献となるとの主張を展開した。

第一章「儀礼の流行 ――象徴世界と日常生活の接合」では、近年かつてなく頻繁に行われるようになっている世帯儀礼について検討した。調査地の今日的な文脈において、儀礼はエスニック・アイデンティティを喚起する象徴世界への「呼びかけ」がなされる最も顕著な場面であると同時に、日常生活を支える社会関係を構築するための格好の契機ともなっている。本章では、世帯儀礼がしばしば犠牲獣の肉をもって客を饗応することを目的と

して催されることに着目し、にわかに活況を呈する儀礼の流行を、単純な伝統や宗教の復興現象としてではなく、生活の必要に応じて新たな共同性を生起させる集合実践として捉える視点を提示した。

第二章「共同性の構築 ――村落の“キョウダイ”関係の想起」では、調査地において複数の村落を包括する紐帯を強調する言説が出現していることを指摘した。先述のようにハニは伝統的に村落を跨ぐ社会単位を形成してこなかったとされるが、広域的な行政区分に沿って実施される交通網の整備や農村開発プロジェクトの進展とともに、現在では村落の境界を越えた社会関係が要請されるようになっている。本章では、そうした広域的な紐帯を正統化するローカルな論理として 12 の村落を「キョウダイ」とみなす歴史記憶が想起されていることに注目し、新たな輪郭をもつ共同性が想像されていく過程を検討した。

第三章「生活の変化 ――“外のモノ”の受容」では、調査地の人々が経験する社会変化を、人やモノ、情報の移動に着目して描いた。出稼ぎの常態化による労働人口の流出と市場経済の浸透にともなう商品化されたモノの流入は、おおむね前世紀末以降、村落生活を根底から変え続けてきた。本章前半ではまず、出稼ぎに従事する若者たちが同郷コミュニティを基盤として都市での生活戦略を成り立たせていることを描き、村落と都市を跨いで結ぶ人と情報の往還のもとに社会変化への対応がなされる状況を指摘した。さらに後半では村落に視座を差し戻し、“外”に由来するモノの受容をめぐる語りによって“われわれ”の生活の変化が文脈化されていることに注目した。本章では、外部社会との継続的な接合のなかでこそ浮かび上がる共同性の境界を跡付け、その多層性を指摘した。

第四章「たばこの配り方 ――“ヨリ”の振幅」では、調査地の人々が社会関係を表現する具体的行為のひとつとなっているたばこの交換に焦点を当てた。本来たばこは“外”に由来するモノだが、今日では親族関係にまつわる“ヨリ”（伝統、しきたり、慣習）への帰属を可視化する行為を成り立たせる道具立てとして、社交の場において欠かすことのできないものとなっている。本章では、“外”のモノが“われわれ”の伝統を体現する行為のなかに組み込まれていく過程を具体的に検討することで、通時的な共同性の変異を指摘した。

第五章「外からのまなざし ――知識・制度との接触」では、漢語概念のハニ語への翻訳過程を検討した。2013 年にハニの名を冠する世界遺産が誕生したことを契機として「世界遺産」や「ハニ族文化」をめぐる新たな政治的言説が流布されるようになったが、調査村落の人々はそこに巻き込まれることなく、生活にもとづく関心をもとに独自の解釈を生み出していった。本章では、漢語としての「文化」とハニ語で語られる“ヨリ”（伝統、しきたり、慣習）の差異についての分析をもとに、主流言説に連なる回路を閉じたままにローカルな解釈が生成されていることを指摘した。

終章「生活の場に潜在する共同性」では、以上の民族誌的記述をあらためて振り返り、従来の研究との接合を試みた。調査地の人々の日常は、儀礼のみならず日常におけるさまざまな局面においても、地域や村落への帰属を問う実践に満ちていた。その境界は外部社会との接触を契機として暫定的に現れるものではあったが、繰り返し反復される度に確か

な納得のもとで了解される。それは対面的な状況や具体的な相互行為をかならずしも伴わないという点において想像されたものであると同時に、空虚な記号のみに依拠するものでもない。本章では以上の検討を通じて、人々が変化のなかにある生活を共有する場としてある限りにおいて、ハニの村落が新たな共同性を涵養すると同時に、その境界を閉じていく係留地となっているという観点を提示した。

本論は、共同性概念を状況的なものとして活用すると同時に、変化のなかにあっても無軌道に広がらず一定の境界内へと収斂していく社会関係の動態的側面を描く民族誌として、従来の研究をさらに展開する視座を示すものである。

【博士論文審査結果要旨】

本論文について、審査員が高い評価を与えたのは以下の 3 点である。

１）長期に亘るフィールドワークの実施に基づくデータの厚みと独自の分析視角

筆者は、雲南省南部のハニ族の自治区という外国人にとってはアクセスが容易ではない地区において足掛け 5 年間に亘るフィールドワークを実施し、厚みのあるデータを蓄積した。これまでにも日本人研究者が半年から 1 年にかけてハニ族村落に滞在した実績はあるが、これだけの長期間に亘って滞在したのは日本人としては筆者が初めてである。第一章で触れられている「世帯儀礼」、第四章で触れられている「タバコの配り方」に関するデータ等は、調査村落との深い信頼関係なくして獲得できるものであるのみならず、調査を行う対象を切り取る上での秀逸な視角に基づいてもいる。現地の中国人人類学者（民族学者）がハニ族に関して調査を行う場合には、往々にして外部の学問的権威者と末端の少数民族という非対称的な関係性が持ち込まれてしまうため、調査データ自体も構造的に表面的なものになりがちである。したがって本論は、データの希少性と単独性、分析視角の独自性という点からも非常に価値の高いものであると言える。

２）エスニシティ／エスニック・バウンダリーの指標としての「モノ」への着目

本論がすぐれているいまひとつの点は、ハニ族のエスニシティを語る上で、口伝が中心の社会において客体化の困難な思想や観念ではなく、携帯電話、湯沸かし器、タバコといった「モノ」とその適応のかたちを指標とすることを徹底的な細部にこだわりつつ試みたことである。筆者が描き出したのは、新しいモノの流入がコミュニティを変えていく様子ではなく、逆に、モノがコミュニティの閉じた論理のなかに経年的に組み込まれていく過程とその帰結である。たとえば元来は外来のものであるタバコは、その配り方や嗜好品としてのたしなみ方自体に集団内の序列や関係の親縁性を反映させるようになり、その様式がエスニシティにまつわる自他を認識する上でのひとつの指標となっていった。モノの適応のかたちとその変化がより大きな共同性（＝エスニシティ）の変化ともパラレルな関係にあることに関し、その描き方自体にはもう少し奥行きが欲しかったが、議論の骨格が持

つオリジナリティは高く評価できる。

３）「対面的共同性」と「想像の共同性」をつなぐもの

３点目として挙げておきたいのは、本論がある程度で尽くした感がある「共同性」にまつわる議論に新たな視点を提供したことである。それは、これまでの共同性にまつわる議論が、共同性の指標となり得るものの抽出にばかり腐心してきたのに対し、本論が、小さな共同性と大きな共同性との相関とでも呼ぶべき関係性に着目したことである。前者が「対面体共同性」、すなわち、日々顔を合わせる相対的に狭い範囲で培われる分かりやすい共同性であるのに対し、後者は「想像の共同性」、すなわち、同じくハニを自称しながらも日常を共有せず、危うい一体性の感覚のもとで辛うじて成立しているような共同性だと言える。両者の間には確実に乖離があるが、一方で、先に述べたモノの適応の様式、儀礼様式の変化の共有される範囲が居住領域を越えて静かに拡大されていくなか、二つの共同性もまた接点を刷新していく。村落を、そうした接点のもととなる生活の型を再帰的なプロセスのなかで再生産しつづける「係留地」とする視点は秀逸である。

審査の過程ではいくつかの疑義も投げかけられた。まず、モノに関するデータの厚みに比して、親族や生業といったオーソドックスな民族誌に含まれるような領域に関するデータが薄いという指摘があった。あくまで 5 年間という現地滞在の長さを考慮した場合の話ではあるが、モノに対する執着に比しての相対的な淡泊さに関しては、その是非をめぐって審査委員のなかでも評価が分かれた。他方、審査委員全員が共通して指摘したのは、先行研究のレビューの部分とデータを提示している部分との間にある捻じれについてである。本論部分はあくまで中国のハニ族に関するものであるにも拘らず、先行研究ではもっぱらタイのアカ（広義のハニに含まれる民族）に関する人類学的研究のレビューに終始しており、そのずれが疑問視されたのである。中国語で書かれた先行研究が多くの場合政治的バイアスを含んでいることを考慮しての意識的捨象に基づくものではあったが、少なくともそうした事情への言及が欲しかった。

また、共同性に関する議論については、その新規性を評価する声が強かった一方で、何をもって共同性が構築・強化されているとするかという点にまつわる議論が短絡的になりがちであるという指摘もあった。時折、「儀礼的な共食の機会の多さが共同性を涵養する」といった非常に単純な議論が散見され、章によって議論の深浅に明らかに差があるのがいささか残念ではあった。

ただし、こうした部分的な難点は、全体としての本論の意義を損なう次元のものではない。本論は、優れたエスノグラフィであると同時に、コミュニティの新自由主義的な「開かれ方」や「崩れ方」を志向する議論が人類学において趨勢を占めるなかにあって、中国の少数民族村落をあえて「閉じた」世界として捉え直す手法を提案する貴重な論考として位置づけることが可能である。このような姿勢は人類学的議論への汎用的な応用が可能で

あり、今後の理論的展開にも意味のある余地を残した。したがって、博士論文としての十分な水準に達していると評価できる。

【審査結果】

本論文の公開審査は、2019 年 1 月 31 日（木）の 17 時 00 分から 19 時 00 分にかけて、５号館 4 階の 423 室で行われた。審査員からの鋭い質問に対して時折答えに窮する局面も見受けられたが、論文提出者は、様々な角度からの質問やコメントに高度な論理を駆使しつつ誠実に対応し、あらためて高い学術的能力を持つことを証明した。よって、審査委員は全員一致で阿部朋恒氏に博士（社会人類学）の学位を授与することが適当であると判断した。